

山吹

泉鏡花

青空文庫

序

山吹の花の、わけて白く咲きたる、小雨の葉の色も、ゆ
あみしたる美しき女の、眉あおき風情に似ずやとて、――

時 現代。

所 修善寺温泉の裏路。

同、下田街道へ捷徑の山中。

人 島津正（四十五六）洋画家。

縫子（二十五）小糸川子爵夫人、もと料理屋「ゆかり」の娘。

辺栗藤次（六十九）門附の人形使。

ねりものの稚児。童男、童女二人。よろず屋の亭主。
馬士一人。

ほかに村の人々、十四五人。

候

四月下旬のはじめ、午後。――

第一場

場面。一方八重の遅おそざくら桜、三本ばかり咲満ちたる中に、よ
 ろず屋の店見ゆ。鎖とぎしたる硝子戸がらすどに、綿、紙、反もの類。生な
 椎茸ましいたけあり。起癢散きはいさん、清暑水など、いろいろに認したたむ。一枚
 戸を開きたる土間に、卓テエブル子椅子いすを置く。ビール、サイダア
 の鑊びんを並べ、菰こもかぶり一樽ひとたる、焼酎しょうちゅうの瓶かめ見ゆ。この店の
 傍わきすぐたんぼに田圃。

一方、杉の生垣を長く、下、石垣にして、その根を小流こながれ走
 る。石垣にサフランの花咲き、雑草生ゆ。垣の内、新緑にし

て柳一本、道を覗ひともときて枝垂のぞる。背景勝手に、紫の木蓮もくれんあるもよし。よろず屋の店と、生垣との間、逕みちをあまして、あとすべて未だ耕いまさざる水田みづた一面、水草を敷く。紫雲英げんげの花あちこち、菜の花こぼれ咲く。逕をめぐり垣に添そいて、次第に奥深き処、孟宗もうそうの竹藪たけやぶと、槻けやきの大樹あり。この蔭より山道をのぼる。

狭き土間、貧しき卓子テエブルに向つて腰掛けたる人形使つかい——辺栗へぐり藤次とうじ、鼻の下を横撫よこなでをしながら言う。うしろ向のままなり。

人形使 お旦那だんな——お旦那——もう一杯注ついで下せえ。

万屋 （店の硝子戸の内より土間に出づ）何もね、旦那に（お）の字には及ばないが、（苦笑して）親仁おやじ、先刻さつきから大分明けた

ではないか。……そう飲んじやあ稼げまいがなあ。

人形使　へ、へ、もう今日は稼いだ後だよ。お旦那の前だが、これから先は山道をねぐら塹へ帰るばかりだでね——ふりふりとよ。万屋　親仁の、そのふりふりは、聞くまでもないのだがね、塹にはまだ刻限が早かろうが。——私も今日は、わしこうして一人で留守番だが、湯治場の橋一つ越したこつちは、この通り、ひっそり閑で、かん人通りのないくらい、修善寺は大した人出だ。親仁はこれからが稼ぎ時ではないのかい。

人形使　されば、この土地の人たちはじめ、諸国から入込いりこんだ講こ中うじゅうがな、媼おば、かかあ媽々、じい爺、まっくろ孫、真黒で、ごまとんとはや護摩の煙が渦を巻いているような騒ぎだ。——この、時々ばらばらと

来る梅雨模様の雨にもめげねえ群集だでね。相当の稼ぎはあっただが、もうやがて、大師様が奥の院から修禅寺へお下りだ。
——遠くの方で、ドーンドーンと、御輿の太鼓の音が聞えては、誰もこちとらに構い手はねえよ。庵を上げた見世物の、じゃ、じゃん、じゃんも、音を潜めただからね——橋をこつちへ、はい、あばよと、……ははは、——晩景から、また一稼ぎ、みつちりと稼げるだが、今日の飲代にさえありつけば、この上の欲はねえ。——罷り違ったにした処で、往生寂滅をするばかり。（ぐつたりと叩頭して、頭の上へ硝子杯を突出す）——お旦那、もう一杯、注いで下せえ。

万屋 船幽霊が、柄杓を貸せといった手つきだな。——底ぬ

けと云うは、これからじまった事かも知れない。……商売だからいくらでも売りはするが。（呑口のみぐちを捻ひねる）——親仁、またそこらへ打倒ぶったおれては不可いけないよ。

人形使 往生寂滅をするばかり。（がぶりと呑んで掌てのひらをチュウと吸う）別して今日は御命日だ——弘法こうぼう様が速すみやかに金かねぴかものの自動車へ、相乗あいのりにお引取り下されますてね。

万屋 弘法様がお引取り下さるなら世話はないがね、村役場のお手数になつては大変だ。ほどにしておきなさいよ。（店の内に入らんとす。）

人形使 （大おおきな声して）お旦那、もう一杯下せえ。

万屋 弘法様の御祭だ。芋が石になつては困る。……もの惜おしみを

するようで可厭^{いや}だから、ままよ、いくらでも飲みなさい。だが、いまの一合^{いっくわい}たつぷりを、もう一息にやつたのかい。

人形使 これまでは雪見酒^{ゆきみしう}で、五合^{ごんぱい}一寸^{いっせん}たちまちに消えるだよ。

よ。……これからがお花見酒だ。……お旦那、軒^の八重桜は、

三本揃^{そろ}つて、……樹^{わけ}は若^{わか}えがよく咲きました。満開だ。——

軒^{かど}の門^{かど}にこのくらい咲いた家は修善寺中に見当らねえだよ。――

――これを視^{なが}めるのは無^た銭^だだ。酒は高^た価^けえ、いや、しかし、見事だ。ああ、うめえ。

万屋 くだらない事を言いなざるな、酔ったな、親仁。……

人形使 これというも、酒の一杯や二杯ぐれえ、時たま肥料^{こやし}にお施^せしなされるで、弘法様の御利益だ。

万屋 詰つまらない世辞を言いなさんな。——全くこの辺、人通りのないのはひどい。……先刻さつき、山越やまごしに立野たつのから出るお稚児を二人、大勢で守立もりたてて通ったきり、馬士うまかたも見掛けない。——留守は退屈だ——ああ太鼓が聞える。……

この太鼓は、棒にて荷にないっりかけたるを、左右より、二人して両面をかわるがわる打つ音なり、ドーン、ドーンドーン、ドーンと幽かすかに響く。

人形使 笙しょう筆ひ筆ちりき、紋もん着つき袴ばかまだ。——消防夫しやうぼうしが揃そろつて警護で、お稚児がついての。あとさきの坊様は、香かうを焚たかつしやる、御経みこしかつを読まつしやる。御輿みこしかつ昇のぼぎは奥の院十八軒の若い衆しゅが水干すいかんえぼし烏帽子だ。——南無大師なむだいし、遍照金剛へんじやうこんごうッ！ 道の左右は人

間の黒山だ。お捻ひねりの雨が降る。……村の嫁女は振袖で拝みに出る。独鈷とっこの湯からは婆様ばあさまが裸体はだかで飛出す——あははは、やれ
さてこれが反対あべこべなら、弘法様は嬉しかんべい。

万屋 勝手にしろ、罰の当った。(店へ入る。)

人形使 南無大師遍照金剛。——(ちびりとのみつつ、ぐたりと
なる。)

夫人、雨傘をすぼめ、柄を片手に提てさげげ、手提な持添ながう。櫛くし
巻き、引ひかけ帯、駒下駄こまげたにて出づ。その遅桜なを視みめ、

夫人 まあ、綺麗きれなこと——苦勞くろうをして、よく、こんなに——

(間) ……お礼を言いたいようだよ——ああ、ほんとうに綺麗
だよ。よく、お咲きなこと。(かくて、小流こながれに添よいつつ行く。)

石がきにサフランの花を見つつ心付く）あら鯉こいが、大な鯉おおきが、

——（小流を覗のぞく）まあ、死んでるんだよ。

やや長き間ま。——衝つと避けて、立離るる時、その石垣に立掛けたる人形つかいの傀にんぎよう、目とまに留る。あやつりの竹の先に、白拍子の舞の姿、美しく藹ろうたけたり。夫人熟じつと視みて立停たちどまる。無言。雨の音。

ああ、降つて来た。（井菊と大きくしるしたる番傘を開く）まあ、人形が泣くように、目にも睫毛まつげにも雫しずくがかかつてさ。……

（傘を人形にかざして庇かばう。）

人形使みじかのれん（短き暖簾のれんを頭ずにて分け、口大おおきく、皺しわ深く、眉迫り、ごま塩しおひげ硬く、真赤まっかに酔えいしれたる面つらを出し、夫人のその姿を

じろりと視^みる。はじめ投頭巾^{なげずきん}を被^{かぶ}りたる間、おもて柔和なり。
いま頭巾を脱いだる四角な額に、白髪^{しらが}長くすくすくとして面^{おもて}凄^{さま}
じ。）

画家 （薄色^{なかおれぼう}の中折帽、うすき外^{がい}套^{とう}を着たり。細^{ほそ}面^{おもて}にし

て清く瘦^やす。半ば眠れるがとき目^{まな}ざし、通りたる鼻下に白き
毛の少し交りたる髭^{ひげ}をきれいに揃えて短く摘む。おもての色や
や沈み、温和にして、しかも威容あり。旅館の貸下駄にて、雨
に懸念せず、ステッキを静^{しずか}につき、一度桜を見る。）

人形使 （この時また土間の卓^{テエブル}子にむかつてうつむく。）

画家 （夫人の身近に、何等の介意なき態度）ははあ、操りです
な。

夫人 先生——ですか、あの、これは私のじゃあございませんの。
 画家（はじめて心付きたる状さまにて）どうも、これは失礼しまし
 た。いや、端はなから貴女あなたがなさると思つた次第でもありません。
 ちよつと今時珍しかったものですから。——近頃は東京では、
 場末の縁日にも余り見掛けなくなりました。……これは静しずかでし
 ような。裏を返すと弁慶がおおなぎなた大長刀を持つて威張つてゐる。……
 ……その弁慶が、もう一つ変わると、赤いはちまき願巻をしめたたこ鯛になつ
 て、踊おどりを踊るのですが、これには別に、そうした仕掛しかけも、から
 くりもないようです。——（覗き覗き、すま済して夫人のさしかざ
 したる番傘の中へ半身）純、これは舞姫ばかりらしい。ああ、
 人形は名作だ。——御覧なさいすこ凄すごいようです。……誰が持つて

いますか。……どうして、こんな処へほうり出しておきますかね。

夫人 人形つかいは——あすこで、（軽く指し、ゆびさ声を低くす）お酒を飲んでいるようです。……そうらしいお爺さんが見えませんでした。

画家 うまいでしょうな、きつと……一つ使わせてみとうござい
ますね。

夫人 およしなさいまし、先生。……たいそう酔っているようですから。

画家 いかにも、酔っ払っていては面倒ですね。ああ、しかし、
人形は名作です——かえり帰途にまた出逢うかも知れない。であ（半ばつぶや眩

く）貴女、失礼をいたしました。（冷然として山道の方へ行く

。）

夫人（二三歩あとに縫^{すが}る）先生、あの……先生——どちらへ？

画家（再びはじめて心付く）いや、（と軽く言う。間）……先

生は弱りました。が、町も村も大変な雑^{ざつ}鬧^{とう}ですから、その山

の方へ行ってみます。——貴女は、（おなじく眠れるがごとき

目のまま）つい、お見それ申しましたが、おなじ宿にでもおい

でなのですか。

夫人 ええ、じき（お傍^{そば}にと言う意味籠^{こも}る）……ですが、階下^{した}の

奥に。あの……

画家 それはどうも——失礼します。（また行く。）

夫人（一步縋る）先生、あのここへいらつしやりがけに、もしか、井菊の印半纏しるしばんてんを着た男衆おとこしゅにお逢いなさりはしませんでしたか。

画家 ああ、逢いました。

夫人 何とも申しはいたしません？……

画家（徐に腕を拱くおもむろ こまぬ）さあ……あの菊屋と野田屋へ向つて渡る

とげつきよう
渡月橋とか云うのを渡りますと、欄干に、長い棹さおに、蓑みのを掛

けたのが立ててあります。——この大師の市いちには、盛さかんに蓑を売

るようです。その看板だが、案山子かかしの幟のぼりに挙げたようでおかし

い、と思つて、ぼんやり。——もつとも私も案山子に似てはい

ますが、（微笑ほほえむ）一枚、買いたいけれども、荷になると思つ

て見ていますと、成程、宿の男が通りかかりました。

夫人 ええ、そうして……

画家 ああそうです。（拱きたる腕を解く）……「そこに奥さま
がおいでです。」と言つて行き過ぎました。成程……貴女の事
でしたか。お連つれになつて一所に出掛けたとでも思つたでしょう
——失礼します。

夫人 まあ、先生。……唯ただいま今は別々でしたけれど、昨夜おそく
着きました時は、御一所でございましたわ。

画家 貴女と……

夫人 ええ。

画家 存じませんな。

夫人 おおひと 大仁で。……自動車はつい別になりましたんですが、：

：おなじ時に、――

画家 私は乗合でしたが――さよう……お一方^{ひとかた}、仕立てた方

があつたように思いますが、それは、至極当世風の髪も七三で

……（と半ば言う。）

夫人 その女が……（やや息忙^{いきげわ}しく）その女が、先生、宿へ着

きますと、すぐ、あの、眉毛^{まみえ}を落しましたの。（顔を上げつつ、

颯^{さつ}とはなじろむ）髪もこんなにぐるぐる巻にしたんです。

画家 ははあ。（いぶかしそうに、しかし冷静に聞くのみ。）

夫人 先生。（番傘を横に、うなだれて、さしうつむく。頸^{えり}脚^{あし}

雪^{あざむ}を欺く）宿の男衆が申したのは、余所^{よそ}の女房という意味では

ないのです。（やや興奮しつつ）貴方あなたの奥さまという意味でございました。

——間——

画家（かくても、もの静しずかに）……と仰おつしや有ると？

夫人 昨晚、同じ宿へ着きますと、直ぐ、宿の人に——私は島津先生せんせいの——あの私は……（口籠くちごもる。小間すこしきま）お写真や、展

覧会で、蔭ながらよく貴方を存じております。——「私は島津の家内ですが」と宿の人に——「実は見付からないようにおなじ汽車で、あとをつけて来たんです。」辻棲つじつまはちつと合あわなかも存じませんが、そう云いましたの。……その次第わは「島津は近頃浮気をして、余所よその婦おんなと、ここで逢曳あいびきをするらしい。」

……

画家 私が。

夫人 貴方が、あの、そして、仮に私の旦那様が。

画家 それは少々怪しかりません。（苦笑する。）

夫人 堪忍して下さいまし。先生、——「座敷を別に、ここに忍

んで、その浮気を見張るんだけど、廊下などで不意に見附か
つては不可いから、容子ようすを変えらんだ。」とそう言つて、……

いきなり鏡台で、眉を落して、髪も解いて、羽織を脱いでほう

り出して、帯もこんなに（なよやかに、頭つむりを振向く）あの、蓮は

葉すはにしめて、「後生ごしょう、内証だよ。」と堅く口止くちどめをしました

上で、宿帳のお名のすぐあとへ……あの、申訳はありませんが、

おなじくと……

画家 (微かすかに眉を顰ひそむ。しかし寛容に) 保養に来る場所ところですから、

そんな悪戯いたずらもいいでしょうな——失礼します。

夫人 あれ、先生、お怒りも遊ばさないで……

画家 綺麗な奥さんに悪戯をされて——かえって喜んでいるかも知れません。——しかし失礼します。

夫人 どうしましょう、先生、私……悪戯どころではありません。

画家 悪戯どころでないというは？ (この時はじめて確しかと言う。)

夫人 (激して、やや震えながら) 後生です。見て下さいまし。

貴方に見て頂きたいものがあるんです。(外套がいうの袖を引く、

籠こもれる力に、画家を小流こながれの縁ふちに引戻す) ちよつと御覧なさい

まし。

鯉こいを指す、死したる鯉、この時いまだ客者かくしやの目につかず。

画家 おお、これは酷ひどい。——これは悲惨だ。

夫人 先生、私は、ここに死んで流れています、この鯉の、ほんの死際しにぎわ、一息前と同じ身の上でございます。

画家 （無言。……）

夫人 （間）私には厳しく追手おつてが掛かっております。見附かりますと、いまにも捉つかえられなければなりませんものですから。——

途中でお姿をお見上げ申し、お宿まで慕もつて参まゐつて、急の思いつきで、失礼な事をいたしました。一生懸命なのです。そしてちよつとの間まに、覚悟をしますつもりであります。——眉を落

して、形をかえて、貴方の奥さまになつて隠れていまして、人出入の激しい旅館やどでは、ちつとも心が落着きませんから、こうして道に迷つております。どうぞ、御堪忍なすつて下さいまし。……夢にも悪戯ではないのですから。

画家　いたし方がありますまいな。

夫人　（もの足りなさに、本意ほんいなげにて）無理にもお許し下さいましたか。……その上なお言葉に甘えますようですけれど、お散歩の方へ……たとい後うしろへ離れましても、御一所に願えますと、立派に人目が忍べます。——貴方（弱く媚こびて）どうぞ、お連れ下さいましな。

画家　（きつぱりと）それは迷惑です。

夫人 まあ。——いいえ、お連れ下さいましても、その間に、ただ（更に鯉を指す）この姿になります覚悟を極めますだけなのでございますもの。

画家 それは不可いけませんな。御事情はどんなであろうと、この形になつては仕方ありません。

人形使 （つんのめりたるが猛然と面を擡おもてげ）お旦那、もう一杯下せえ。お旦那。

画家 （この声を聞く。あえて心に留めず）私一いちにん人としてはこんな姿におなりなさるのだけは堅くお止め申します——失礼をします。（衝と離れて山手に赴く。）

夫人 （画家の姿、楓けやきの樹立こたちにかくれたる時、はらはらとあとを

追い、また後戻りす。見送りつつはかないねえ！

わが声に、思わず四辺あたりを視る。降らぬ雨に傘からかさを開き、身を恥

じてかくすがごとくにして、悄しょうぜん然と、画家と同じ道、お

なじ樹立に姿を消す。

人形使 お旦那、もう一杯下せえ。

万屋 ちよッ、困らせるじゃあないか。（ついで与う。）

人形使 そのかわり、へ、へ、今度はまた月見酒だよ。雲がかかると満月がたちまちかくれる。（一息に煽あお切る）ああッ、う

——い。……御勘定……（首にかけた汚きたなき大蝦蟇おおがまぐち口より、だら

しなく紐ひもを引いてぶら下りたる財布を絞り突つき銭せんする）弘法様

も月もだがよ。銭あまねも遍く金剛を照すだね。えい。（と立つ。脊

高き瘦脛やせずね、破股引やれももひきにて、よたよた。酒屋は委細構わず、さつさと片づけて店へ引込ひっこむ。）えい。（よたよた。やがて人形の前までよたよたよた）はッ、静御前様。（急に恐入ていつたる体にて、ほとんど土下座をするばかり。間。醉眼を鯉に見向く）やあ、兄弟、浮かばずにまだ居たな。獺かわうそが銜くわえたか、鼬いたちが噛かつたか知らねえが、わんぐりと齒形が残つて、蛆うじがついては堪たまらねえ。先刻さつきも見ていりや、野良犬が嗅かいで嗅かぎつばな放はなして失うせおつた。犬も食わねえとはこの事だ。おのれ竜にもなる奴やつが、前世ごうの業か、死恥せぢを曝さらすは不便ふびんだ。——俺おらが葬おさつてやるべえ。だが、蛇塚、猫塚、狐塚よ。塚といえは、これ突流すではあんめえ。土に埋うずめるだな、土葬にしべえ。（半ばくされたる鯉の、

たよたよた。

夫人、樹立の蔭より、半ば出でてこの体を窺いつつあり。

人形使 えい。(よたよた) えい。(よたよたよた。)

夫人（次第に立出で、あとへ引かえしざまにすれ違う。なおそ

の人形使を凝視しつつ）爺さん、爺さん。

人形使 （丈高く、赤き面にて、じろりと不気味に見向く。魔のごとし。）

夫人 （大胆に、身近く寄る）私は何にも世の中に願はなし、何の望みも叶わなかつたから、お前さんの望を叶えて上げよう。

宝石も沢山ある。お金も持っています——失礼だけれど、お前さんの望むこと一つだけなら、きつと叶えて上げようと思うんだよ。望んでおくれな。爺さん、叶えさしておくんなさいな。

人形使 （無言のまま睨むがごとく見詰めつつ、しばらくして、路傍に朽ちし稲塚の下いなかの古縄を拾い、ぶらりと提げ、じりじりと寄る。その縄、ぶるぶると動く。）

夫人 ああれ。（と退る。^{すさ}）

人形使 （ニヤリと笑う。）

夫人 ああ蛇かと思つた。——もう蛇でも構わない。どうするの
——どうするのよ。

人形使 （ものいわず、皺手^{しわで}をさしのべて、ただ招く。招きつつ、
あとじさりに次第に樹立^いに入る。）

夫人 どうするのさ。どうするのよ。（おなじく次第に、かくて
樹立に隠る。）

舞台しばらく空し。白き家鴨^{あひる}、五羽ばかり、一列に出でて田
の草の間を漁^{あさ}る。行春^{ゆくはる}の景^{かげ}を象徴するもののごとし。

馬士 （樹立より、馬を曳^ひいて、あとを振向きつつ出づ。馬の背

に米こめだわら 俵 二俵。奉納。白米。南無大師遍照金剛の札を立つ）
 ああ氣味の悪い。真昼間まつびるま何事だんべい。いや、はあ、こげえ
 な時、米が砂利になるではねえか。（眉毛に唾つばしつつ俵を探り
 て米を嚙かむ）まず無事だ。（太鼓の音近く聞ゆ）——弘法様の
 お底かげだんべい。ああ氣味の悪い——いずれ魔ものだ、ああ恐
 怖ねえ。

——廻る——

第二場

場面。——一方やや高き丘、花菜の畑と、二三尺なる青麦あおむぎ

ばたけ
畠と相あい連つらる。

まふところ

丘のへりに山吹の花咲揃えり。下は一面、山や懷まふに深く崩れ込みたる窪地くぼちにて、草原くさはら。苗樹ばかりの

桑の、薄く芽ぐみたるが篠しのに似て参差さんしたり。

一方は雑木山、とりわけ、かしの大樹、高きと低きふたみき二一幹、

葉は黒きまで枝とともに茂りて、黒雲の渦のごとく、かくて花菜の空の明るきに対す。

花道をかけて一ひと条、皆、丘と丘との間の細道の趣なり。遠

景一帯、伊豆の連山。

画家（一人、丘の上なる岨がけに咲ける山吹と、畠の菜の花の間高

き処しずかに、静しずかにポケット・ウイスキーを傾けつつあり。——鶯遠うぐいす

く音ねを入れる。二三度鶏の声。遠音とおねに河鹿鳴かじかく。しばらくして、

立ちて、いささかものに驚ける状さます。なお窺うかがうよしして、花と葉しげりの茂に隠る。)

夫人 (傘を片手に、片手に縄尻を控えて——登場。)

人形使 (猿さるぐつわ轡こうもりがさのまま蝙蝠傘を横に、縦に十文字に人形を

背負い、うしろ手に人形の竹を持ちたる手を、その縄にて縛いましめられつつ出づ。肩を落し、首を垂れ、屠所としよに赴くもののごとし。

しかも酔える足どり、よたよたとして先に立ち、山懷の深く窪み入りたる小暗おぐらき方かたに入り来りきた、さて両腕を解けば縄落まことつ。実

はいましめたるにあらず、手にてしかく装いたるなり。人形を

桑ひとときの一木に立掛けひざまず、跪いて拝む。かくてやや離れたる処にて、

口の手拭てぬぐいを解く) 御新造様。そりや、約束の通り遣やつて下せ

え。（足手を硬直^{かたく}し、突伸べ、ぐにやぐにやと真俯^{まうつむ}向けに草に俯^ふす。）

夫人 ほんとうなの、爺^{おじ}さん。

人形使 やあ、嘘にこんな真似が出来るもので。それ、遣附^{やつ}けて下せえまし。

夫人 ほんとうに打^ぶつの？

人形使 血の出るまで打って下せえ。息の止^{とま}るまでもお願^{ねげ}えだよ。

夫人 ほんとうかい、ほんとうに打つのかね。

人形使 何とももう堪^{たま}らねえ、待兼ねますだ。

夫人 ……あとで強情^{ねだ}られたって、それまでの事だわね。——で

は、約束をしたものだから、ほんとうに打ってよ。我慢をおし。

（雨傘にて三つ四つ。と続けさまに五つ六つ。）

人形使 堪えねえ、ちつとも堪えねえ。

夫人 （鞭打ちつつ）これでは——これでは——

人形使 駄目だねえ。（寝ながら捻向く）これでもか、これでもか、と遣つて下せえ。

夫人 これでも、あの、これでも。

人形使 そんな事では、から駄目だ。待たつせえまし。（布子のぬのこ

袖なし、よごれくさりし印半纏ととも脱ぎ、瘦せたる皺わはだ

膚を露出す。よろりと立つて樹にその身をうしろむきに張り

つく。振向きて眼を睜りながら）傘を引破いて、骨と柄になせ

えまし。それでは、婆娑々々するばかりで、ちつとも肉へ応え

ねえだ。

夫人 （ため息とともに） ああ。

人形使 それでだの、打つものを、この酔払いの乞食爺こじきじじいだと思つては、ちつとも力が入らねえだ。——御新造様が、おのれと思う、憎いものが世にあるべい。しゅうとめしゅうと 姑か、舅か、小こじゅうと 姑か、他人か、縁者、友だちか。何でも構う事はねえだの。

夫人 ああ。

人形使 その憎い奴やつを打つと思つて、思うさま引ひっぱた払くだ。可いいか、可いいかの。

夫人 ああ。

人形使 それ、確しっかりさつせえ。

夫人 ああ。あいよ。（興奮しつつ、びりびりと傘を破く。ために、疵つき、指さき腕など血汐浸む——取直す）——畜生——

畜生——畜生——畜生——

人形使 ううむ、（幽に呻く）ううむ、そうだ、そこだ。ちつと、へい、応えるぞ。ううむ、そうだ。まだだまだだ。

夫人 これでもかい。これでもかい、畜生。

人形使 そ、そんな、尻べたや、土性骨ばかりでは埒明かねえ、頭も耳も構わずと打叩くんだ。

夫人 畜生、畜生、畜生。（自分を制せず、魔に魅入られたるものごとく、踊りかかり、飛び上り、髪乱れ、色あおぎむ。打

って打って打ちのめしつつ、息を切る）ああ、切ない、苦しい。

苦しい、切ない。

人形使　ううむ堪らねえ、苦しいが、可い塩梅だ。堪らねえ、いい気味だ。

画家　（土手を伝わって窪地に下りる。騒がず、しかし急ぎ寄り、遮り止む）^{とど}貴女、^{あなた}——奥さん。

夫人　あら、先生。（瞳を睜くとともに、小腕しびれ、足なえて、崩るるごとく腰を落し、半ば失心す。）

画家　（肩を抱く）ウイスキーです——清涼剤に——一体、これはどうした事です。

人形使　（びくりびくりと蠢く。^{うごめ}）

画家　（且つこれを見つつ）どうした事情だか知りません。けれ

ども、余り極端な事をしては不可い。

夫人（吻と息して）私、どうしたんでございましょう、人間界にあるまじき、浅ましい事をお目に掛けて、私どうしたら可いでしょうねえ。（ヒステリックに泣く。）

画家（止むことを得ず、手をさすり脊筋を撫づ）氣をお鎮めなさい。

人形使（血だらけの膚を、半纏にて巻き、喘ぎつつ草に手をつく）はい、……これは、えええ旦那様でござりますか、はい。

画家 この奥さんの……別に、何と言うではないが、ちよつと知合だ。

人形使 はい、そのお知合の旦那様に、爺から申上げます。はい、

ええ、くどい事は、お聞きづろうござりますで。……早い処が、
 はい、この八ツ目鰻うなぎの生干なまほしを見たような、ぬらりと黒い、乾ひ
 からびた老耄おいぼれも、若い時が一度ござりまして、その頃に、は
 い、大いえか罪障を造つたでござります。女子おなごの事でござりまして
 の。はい、ものに譬たとえようもござりませぬ。欄間てんにござる天
 女んを、蛇が捲まいたような、いや、奥庭の池の鯉いもりを、鰍もりが食
 い破りましたそうな儀で。……生命いのちも血も吸いました。——
 旦夢がさめますと、その罪の可おそろし恐さ。身の置所もござりま
 せぬで。……消えるまで、失うせるまでと、雨露に命を打たせて
 おりますうちに——四国遍路で逢いました廻国の御出家——弘
 法様かと存ぜられます——御坊様ごぼうさまから、不思議に譲られたで

ござります。竹操りのこの人形も、美しい御婦人でござりますで、爺が、この酒を喰くらいます節も、さぞはや可い厭やであろうと思
いますで、遠くへお離し申しておきます。担いで帰ります節も、
酒臭い息が掛かろうかと、口に手拭てぬぐいを嚙かみます仕誼しぎで。……美
しいお女中様は、爺の目に、神も同然におがまれます。それに
つけても、はい、昔の罪が思われます。せめて、朝に晩に、こ
の身体からだを折檻せつかんされて、拷問ごうもん苛責かしやくの苦を受けましたら、何
ほどの罪滅しになりましよう、それも、はい、後の世の地
獄は恐れませぬ。現世の心の苦しみが堪えられませぬで、不断
常住、その事ばかり望んではおりますだが、木賃宿の同宿や、
堂宮どうみやの縁えん下のしたに共臥ともふせりをします、婆々ばば媽々かかならいつでも

打ちも蹴りもしてくれましょうが、それでは、念が届きませぬ。はて乞食が不心得したために、お生命までも、おうしないにならっせえましたのは、美しいお方でござりましたもの。やっぱり、美しいお方の苛責かしやくでのうては、血にも肉にも、ちつとも響かぬでござります。——またこの希望のぞみが、幽霊や怨念おんねんの、念願と同じ事でござりましての、この面つら一つを出したばかりで大概の方は遁にげますで。……よくよくの名僧智識か、豪傑な御仁じんでないと、聞いてさえ下さりませぬ。——この老耄おいぼれが生れまして、六十九年、この願望がんもうを起しましてから、四十一年目の今月今日。——たった今、その美しい奥方様が、通りがかりの乞食を呼んで、願掛がんかけは一つ、一ヶ条何なりとも叶えてやろ

うとおつしやります。——未熟なれども、家業がら、仏も出せば鬼も出す、魔ものを使う顔がんしよく色で、威おどしてはみましたが、この幽霊にも怨念にも、恐れなされませぬお覚悟を見抜きまして、さらば、お叶え下されまし、とかねての念願を申出でまして、磔はりつけ柱ばしらの罪人が引廻さましの状をさせて頂き、路傍みちばたながら隠場所かくればしよの、この山崩れの窪溜くぼたまりへ参りまして、お難有ありがたい責折檻せめせつかん、苛責かしやくを頂いた儀でござります。……旦那様。

——もし、お美しい奥方様、おありがとうございます。おありがとうござります。

夫人（はじめて平静に）お前さん、痛みはしないかい。

人形使 何の貴女様、この疼痛いたみは、酔った顔をそよりそよりと春

風に吹かれますも、観音様に柳の枝から甘露を含めて頂きますも、同じ嬉しさでござります。……はたで見ます唯今の、美女でもって夜叉羅刹やしやらせつのような奥方様のお姿は、老耄おいぼれの目には天人、女神をそのままに、尊く美しく拝まれました。はい、この疼痛のござりますうちだけは、骨も筋も柔かに、血も二十代に若返つて、楽しく、嬉しく、日を送るでござりましょう。

画家（且つ傾き、且つ聞きつつ、冷静に金口煙草きんぐちたばこを燻くゆらす）
お爺さん、煙草を飲むかね。

人形使 いやもう、酒が、あか桶おけの水なれば、煙草は、亡者の線香でござります。

画家 喫のみたまえ。（真珠の飾かざりのついたる小箱のまま、衝つと出いだす

。

人形使 はッこれは——弘法様の独鈷とっこのように輝きます。勿もつ体たい

ない。(這はい出だして、画家の金口から吸いつける) 罰の当った——

——勿体ない。この紫の雲に乗りまして、ふわふわと……極楽の空へ舞いましょう。

夫人 おじ 爺さん、もう行くの。……打ぶたれたばかりで、ほんとに可い

いのかい。

人形使 たとい 桂かつらがわ 川がが逆さかさに流れましても、これに嘘はござり

ませぬ。

夫人 何か私に望のぞんでおくれ。どうも私は気が済まない。

人形使 この上の望のぞと申せば、まだ一度も、もう三度も、御折檻、

御打擲ごちやうちやくを願いたいばかりでござります。

夫人　そして、それから。

人形使　はあ、その上の願ねがいと申せば、この身体からだが粉々になります

まで、朝に晩に、毎日毎夜、美しい奥方様の折檻を受けたいばかりでござります。——はや酔も覚めました。もう世迷言よまいごと

も申しますまい。——昼は遠慮がござりますが、真夜中は、狸かろうそ

獺かろうそ、化ものも同然に、とがめ人てのござりませぬ、独鈷の湯へ浸

ります嬉しさに、たつ野の木賃に巢をくつて、しばらくこの山

道を修善寺へ通いましたが——今日かぎり下田街道をどこへな

と流れます。雲と水と申したけれど、天の川と溝どぶの流れと分れ

ましては、もはやお姿は影も映りますまい。お二方様とも、万

代お栄えなされまし。——静御前様、へいへいお供をいたします。

夫人 お待ちなさい、爺さん。おじ（決意を示し、衣紋えもんを正す）私がお前と、その溝川みぞがわへ流れ込んで、十年も百年も、お前のその朝晩の望みを叶えて上げましょう。

人形使 ややや。（声に出さず、顔色のみ。）

夫人 先生、——私は家出をいたしました。余所よその家内でございます。連戻されるほどでしたら、どこの隅にも入れましようが、このままでは身の置おきどころ処がありません。——溝川に死おちた鯉おの、あの浅ましさを見ますにつけ、死んだ身体からだの醜みにくさは、こうなるものと存じましても、やっぱり毒を飲むか、身を投げるか、

自殺を覚悟していました。ただお煩^{うるさ}さの余りでも、「こんな姿になるだけは、堅く止める。」と、おつしやいました。……あの先刻^{さつき}のお一言^{ひとこと}で、私は死ぬのだけは止^やめましてございます。先生、——私は、唯今では、名ばかりの貧乏華族、小糸川の家内でございますが。

画家 ああ子爵でおいでなさる。

夫人 何ですか、もう……——あの、貴方、……前^{ぜん}は、貴方が、西洋からお帰り時分、よく、お夥^{なかま}間^{ごひいき}と御^ご鼻^ひ屑^いを遊ばして、いらして下さいました、日本橋の……（うつとりと更に画家の顔を見る）——お忘れでございますか、お料理の、ゆかりの娘^{ぬい}の、縫^{ぬい}ですわ。

画家 ああ、そうですか。お縫子さん……お妹さんの方ですね。綺麗なお嬢さんがおいでなさるといふ事を、時々風説うわさに聞きました。

夫人 （はかなそうに） ええ、先生は、寒い時寒い、と言うほど以上には、お耳には留まらなかったでございましょう。私は貴方に見られますのが恥かしくツて、貴方のお座敷ばかりは、お敷居越にも伺った事はありませんが、蔭ではお座敷において遊ぶす時の、先生のお言葉は、一つとして聞き洩もらした事はないくらいでございます。奥座敷にお見えの時は、天井の上に俯うつ向けになつて聞きます。裏座敷においでの際は、小庭の中に、湯どのに入つて、衣服きものを着てばかりはいられませんから、裸体はだか

で壁に附着くつつきました。そのほか、小座敷でも広室ひろまでも、我家の暗やみをかくれしのぶ身体からだはまるで鼠ねずみのようで、心は貴方の光のまわりひとりむしに蛾かのようでした。ですが、苦勞人の女中にも、わけ知しりの姉たちにも、氣けぶりにも悟さとられた事はありません。身ぶり素ぶりに出さないのが、ほんとの我が身体で、口へ出して言えないのが、真実の心ですわ。ただ恥かしいのが恋ですよ。――ですがもうその時分から、ヒステリーではないのかしら、少し氣が変だと言われました。……貴方、お察し下さいまし。……私は全く氣が変になりました。貴方が御結婚を遊ばして、あとまる一年、ただ湧わくものは涙ばかり、うるさく伸びるものは髪ばかり。座敷牢ろうではありませんが、附添たちの看護の中に、藻拔もぬけの

ように寝ていました。死にもしないで、じれつたい。……消えもしないで、浅ましい、死なずに生きていたんですよ。

——我が身に返りました時、とし年紀も二十を三つ越す。広い家を

一杯に我儘わがままをさして可愛がつてくれました母親おふくろが亡くなり

ました。めくら盲目の愛がなくなりますと、あかる明い世間が暗くなります。

いままで我まが過ぎましたので、その上の我がまは出来ない義理になりました。それでも、まだ我がままで——兄姉たちや、親類が、たしか確な商人あきんど、もの堅い勤人つとめと、見立ててくれました縁談を断つて、唯今の家へ参りました。

しゅうとめ姑が一人、こじゅうと小姑が、でもどり出戻と二人、女です——夫に事つかう

る道も、第一、家風だ、と言つて、水も私が、郊外の住居すまいです

から、釣瓶つるべから汲くまされます。野菜も切ります。……夜はお姑
 のおともをして、風呂敷でお惣菜そうざいの買ものにも出ますんです。
 ——それを厭いとうものですか。——日本橋の実家からは毎日のお
 やつと晩だけの御馳走ごちそうは、重箱と盤はんだい台で、その日その日に、
 男衆が遠くを自転車で運ぶんです。が、さし身の角が寝たと言
 っては、料理番をけなしつけ、玉子焼の形が崩れたと言っては、
 客の食あまべ余りを無礼だと、お姑に、重箱を足蹴あしげにされた事もあり
 ます。はじめは、我身の不束ふつつかばかりと、怨めうらしいも、口惜くちおし
 いも、ただ謹つつしんでいましたが、一年二年と経ちますうちに、よく
 その心が解りました。——夫をはじめ、——私の身につきまし
 た、……実家さとで預ります財産に、目をつけているのです。いま

は月々のその利分で、……そう申してはいかがですが、内中の台所だけは持つておるのでございますけれど、その位では不足なのです。——それ姪めいが見合あひをする、従妹いとこが嫁よめに行くと言つて、私の曠着すれぎ、櫛笄くしうがいは、そのたびに無くなります。盆くれのつかいもの、お交際つきあいの義理ごとに、友禅も白地も、羽二重、縮緬ちりめん、反ものは残らず払われます。実家さとへは黙つておりますけれど、簞笥たんすも大抵空からなんです。——……………それで主人は、詩をつくり、歌を読み、脚本などを書いて投書をするのが仕事です。

画家 それは弱りましたな。けれど、末のお見込はありましよう。夫人 いいえ、その末の見込が、私が財産を持込みませんと、い

びり出されるばかりなんです。咳せきをしたと言いてはひそひそ、頭を痛がると言いつては、ひそひそ。姑たちが額を集め、芝居や、活動によくある筋の、あの肺病だから家のためにはかえられない、という相談をするのです。——夫はただ「辛抱を、辛抱を。」と言いうんですが、その辛抱をしきれないうち、私は死しんでしまいましよう。ついこの間もかぜを引いて三日寝ました。水にのみに行ゆきます廊下で、「今度などが汐時しおどきじゃ。……養生と言いつて実家うちへ帰したら。」姑たちが話すのを、ふいに痛い胸に聞きいたのです。

画家 それは薄情だ。

夫人 薄情ぐらいで済むものですか。——私は口惜くやしさにかぜが抜

けて、あらためて夫に言つたんです。「喧嘩をしても実家から財産を持つて来ます。そのかわりただ一度で可うござんす。お姑さんを貴方の手で、せめて部屋の外へ突出して、一人の小姑たぶさつかの髻を掴んで、一人の小姑の横ぞつぼうを、ぴしやりと一つお打ちなさい。」と……

人形使 （じりじり乗出す）そこだそこだ、その事だ。

画家 ははは、痛快ですな。しかしおだやか穩でない。

夫人 （激怒したるが、忘れたように微笑む）ほほえ穩でありませんか。

画家 まず。……そこで。

夫人 きさまは鬼だ、と夫が申すと、いきなり私が、座敷の外へ突飛ばされ、倒れる処を髻をつかまれ、横ぞつぼうを打たれま

した。——その晩——昨晚——その晩の、夜はかえつて目につきますから、昨日家出をしたんです。先生……金魚か、植木鉢の草になつて、おとなしくしていれば、実家さとでも、親類いでも、身一つは引取つてくれましょう。私は意地です、それは厭いやです。……この上は死ぬほかには、行き処のない身体からだを、その行きどころを見着けました。（決然として向直る）このおじさんと一所に行きます。——この人は、婦人おんなを虐しいげた罪を知つて、朝に晩に笞しもとの折檻せつかんを受けたいのです。一つは世界の女にかわつて、私がその怨うらみを晴らしましょう。——この人は、静御前の人形を、うつくしい人を礼拝します。私は女に生れました、ほこりと果報を、この人によつて享うけましょう。——この人は、死んだ鯉

の醜い死骸しがいを拾いました。……私は弱い身体からだの行倒れになつた肉を、この人に拾われたいと存じます。

画家（あるいはうなず頷き、また打傾き、やや沈思す）奥さん、更あらためて、お縫さん。

夫人（うれしそうに、あどけなく笑う）はアい。

画家 貴女のそのお覚悟は、他にかえようはないのですか。

夫人 はい、このまま、貴方、先生が手をひいて、旅館へお帰下さる外には――

人形使 そうだ、そうだ、その事だ。

画家（再び沈黙す。）

夫人（すり寄る）先生。

画家 貴女、それは御病氣だ。病氣です。けれども私は医師いしやでない、断言は出来ません。——貴女のお覚悟はよくありません。しかし、私は人間の道について、よく解わかっておりません。何ともお教えは申されない。それから私が手を取る事です。是非善悪は、さて置いて、それは今、私に決心が着きかねます。卑ひきよ怯うに回避するものではありません。私は自分の仕事が忙しい。いま分別をしている余裕が、——人間の小さいために、お恥かしいが出来ないのです。しかし一月、半月、しばらくお待ち下さるなら、その間に、また、覚悟をしてみましよう。

夫人 先生、私は一晩かくれますにさえ、顔も形も変えています。運命は迫っています。

画家 ごもつともです。——（顔を凝視さるるに堪えざるものごとく、目を人形使に返す）爺さん、きつとお供をするかね。

人形使 犬になつて——

凝^{じつ}と夫人を抱き起し、その腰の下へ四^{よつば}這いに入る背に、夫人おのずから腰を掛けつ、なお倒れんとする手を、画家たすけ支う。

馬になつてお供をするだよ。

画家 奥さん、——何事も御随意に。

夫人 貴方、そのお持ち遊ばすお酒を下さい。——そして媒^{なこうど}灼人をして下さい。

画家 （無言にて、罎^{びん}を授け、且つ酌する。）

夫人 （ウイスキーを一ひと煽あおりに、吻ほっと息いきす）爺おじさん、肴さかなをなさ

いよ。

人形使 口上まが擬いに、はい小こ謡うたいの真似まねでもやりますか。

夫人 いいえ、その腐くった鯉こいを、ここへお出でしな。

人形使 や。

夫人 お出でしなね。刃やいばものはないの。

人形使 野道、山道、野宿やじゆくだで、犬おどしは持もつとりますだ。

（腹はらがけのどんぶりより、錆さびびたるナイフを抽ぬきだ出す。）

画家 ああ、奥さん。

夫人 この人と一所いしょに行くのです。——このくらいなものを食べ

られなくては……

人形使 やあ、面白い。俺も食うべい。

画家 (衝と立ちて面を背く。)

——南無大師遍照金剛。——南無大師遍照金剛——遠くに多

人数の人声。童男童女の稚児二人のみまず練りつつ出づ—

—

稚児一 (いたいけに) 南無大師遍照金剛。……

稚児二 (なおいたいけに) 南無大師遍照金剛。……

はじめ二人。紫の切のさげ髪と、白丈長のしろたけなが稚ちこまげ鬚すげとにて、

しずか静しずかにねりいで、やがて人形使、夫人、画家たちを怪あやしむがごと

く、ばたばたと駈かけ抜けて、花道の中ばに急ぐ。画家と夫人

と二人、言い合せたるごとく、ひとしくおなじ向きに立つ。

人形使もまた真似るがごとく、ひとしくともに手まねき、ひとしくともにさしまねく、この光景怪しく凄^{すご}し。妖氣^{ようき}おのずから場^{じょう}に充^みつ。稚児二人引戻さる。

画家 いい児^こだ。ちよつと頼まれておくれ。

夫人 可愛い、お稚児さんね。

画家 (外套を脱ぎ、草に敷く) 奥さん、爺さんとお敷きなさい。

夫人 まあ、勿体ない。

画家 いや、その位な事は何でもありません。が貴女の病気で、私も病氣になったかも知れません。——さあ、二人でお酌をしてあげておくれ。

夫人、人形使と並び坐す。稚児二人あたかも鬼に役せらるる

ものごとく、かわるがわる酌をす。静寂、雲くらし。鶯は

せわしく鳴く。笙しょう筆ひ策さく幽ゆうに聞ゆ。——南無大師遍照金剛——

——次第に声近づき、やがて村の老若男女十四五人、くりかえし唱えつつ来る。

村の人一 ええ、まあ、御身おみたちやあ何をしとるだ。

村の人二 大師様のおつかい姫だ思うで、わざと遠く離れてるだに。

村の人三 うしろから押んで歩行くだに——いたずらをしてはな
んねえ。

村の人四五六 （口々に）来うよ来うよ。（こんどは稚児を真まんな

中に）南無大師遍照金剛、……（かくて、幕に入る。）

夫人（外套をとり、塵を払い、画家にきせかく）ただ一度あり
ましたわね——お覚おぼえはありますまい。酔よつていらしつて、手
お添えになりました。この手に——もう一度、今こんじよう生の思出
に、もう一度。本望です。（草に手をつく）貴方、おなごり惜
しゅう存じます。

画家 私こそ。（喟然きぜんとする。）

夫人 爺おじさん、さあ、行ゆこう。

人形使 ええ、ええ。さようなら旦那様。

夫人 行こうよ。

二人行きかかる。本雨。

画家 （つかつかと出で、雨傘を開き、二人にさしかく） お持ちなさい。

夫人 貴方は。

画家 雨ぐらいは何の障さわりもありません。

夫人 お志頂戴します。（傘を取る時）ええ、こんなじや。

激しく跣足はだしになり、片褸かたづまを引上ぐ、緋ひの紋縮緬もんちりめんの長襦ながじゆ袴ばん艶えん絶ぜつなり。爺おやじの手をぐいと曳ひく。

人形使 （よたよたとなつて続きつつ）南無大師遍照金剛。

夫人 （花道の半ばにして振かえる）先生。

画家 （やや、あとに続き見送る。）

夫人 世間へ、よろしく。……さようなら、……

画家 御機嫌よう。

夫人 (人形使の皺手しわでを、脇に搔込かいこむばかりにして、先に、番傘をかざして、揚幕へ。――)

画家 (佇たたずみ立つ。――間。――人形使の声揚幕の内より響く。)

――南無大師遍照金剛――

夫人の声も、またきこゆ。

――南無大師遍照金剛――

画家 うむ、魔界かな、これは、はてな、夢か、いや現実だ。――
 (夫人の駒下駄を視みる) ええ、おれの身も、おれの名も棄てようか。(夫人の駒下駄を手にする。苦悶くもんの色を顕あらわしつつ) いや、仕事がある。(その駒下駄を投棄つ。)

雨の音留^やむ。

福地山修禪寺の暮六ツの鐘、鳴る。

——幕——

大正十二（一九二三）年六月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十六卷」岩波書店

1942（昭和17）年10月15日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2011年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山吹 泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>